

新納忠元物語 三

伊佐市立菱刈郷土資料館 指導員 原田純一

島津軍の菱刈侵攻 前編 (忠元・市山城主となる)

弘治三年(1557年)やつと蒲生氏を降した島津貴久は、その後、横川、栗野から加久藤盆地を制圧し、表向き日向の伊東氏を討つと称し、自ら軍勢を率いて日向飯野(現在のえびの市)に出陣し伊東氏を牽制していた。ところが突如、永禄十年(1567年)十一月二三日、七千余の兵を率いて菱刈田中の陣之尾に進み、義久の兵八千余は、南側の諏訪山に陣を構え、忠平(義弘)の兵七千余は、飯野から般若寺越えの山道を抜け菱刈麓後の稻荷山に布陣した。翌二四日、城兵が思ったより少

ないことを確認すると、義久・義弘に命じて、馬越城の東西より攻撃させた。城を守っていた菱刈氏の重臣井手籠重・重房等は矢石を飛ばして応戦した。やがて先陣を務める忠元は、北西の搦め手から旗本衆らと共に城壁を越えて攻め入り激戦の末重之等は自害し、二百余りの城兵も討死して馬越城はわずか二日間で陥落した。戦いの行方を見守っていた菱刈氏家督代行の菱刈隆秋は、周辺の八城全てを放棄し、要衝の大口城にその将兵を集め、更に人吉の大豪族相良氏からの援軍を合わせて防備を固めた。その数は、三千とも四千とも伝えられている。改めて島津軍に決戦を挑むた

めであった。島津軍は、菱刈氏が放棄した諸城には、旗本の将兵を配置し大口城を孤立させた。大口城に対峙する市山城には島津の武将、市来備後守・伊集院刑部小輔・平田加賀守が守備についた。永禄十年(1567年)十二月二十九日、菱刈・相良連合軍の度々の襲撃に業をにやした市山城の三将兵は、わずばかりの兵を率いて市山川を渡り大口城近くで密かに偵察していた。これに気付いた大口城の将兵一千人余りが出撃してきた。三将は兵をまとめて市山川川涯まで退却し迎え撃ったが、衆寡敵せず枕を並べて三将は討ち死にした。この戦いのことを後に、『西原川涯の戦い』と呼ばれている。この事態を憂慮した島津貴久は、永禄十一年(1568年)正月市山城の城主に、馬越城攻め等で武功のあった『新納忠元』を抜擢した。忠元は、

四十一才で始めて一城を預かる武將になったのである。

☆次回は『島津軍の菱刈侵攻 中編』



「西原川涯の戦い」のあった周辺地図

(参考資料)

- ・旧記雑録拾遺 忠元勲功記
- ・大口郷土誌 上巻
- ・菱刈町郷土誌 改定版